



1 広範囲で壊滅的な被害を受けた沿岸部。変わり果てた故郷の姿を見つめる子どもたち (5.1 宮城県東松島市) 2 住宅街に乗り上げた船 (4.29 東松島市) 3 大熊町のヒラメ養殖施設。坂本さんも家族で見学を訪れたことがあった (5.28 福島県大熊町)

「大熊は本当にいい町。いつか家族みんなで戻りたい」と話す3人の娘さんたち。前列左から次女・理恵さん (高1)、長女・榛香さん (高3)、三女・安紀さん (小5)



災害から何を学ぶか

特集

3月11日を境に日本は変わった。
東日本を襲った強烈な揺れとすさまじい威力の津波。
地震の規模を示すマグニチュードは国内観測史上最大の9.0。
映し出される惨状の前に、ただ息をのみ、誰もが言葉を失った。
「想定外」「壊滅状態」… 想像を絶する被害が報道で伝えられた。

東日本大震災の影響は一次的な被害にとどまらなかった。
深刻な原発問題、経済問題、余震も未だ収まっていない。

災害はいつしか、そして突然やってくる。
わたしたちは起こりうるあらゆる災難を想定できているだろうか。
家族の命を守る手段、避難、災害に弱い人を支える共助…
今、わたしたちの意識と備えが問われている。

明日、今日、そして今、災害が起きないとは限らない。
未曾有の大震災を目の当たりにし、国難に直面する今、
わたしたちにできること、すべきことは何なのか――



大地震発生、その時――

ガタガタッ。突然襲いかかる激しい揺れ。キッチンにいた坂本弘子さんは、立ってられないほどの揺れによるめきました。
「地響きのような、ドドドドドド…っていう音が聞こえました。食器棚にもたれるように押さえるのがやっとで、身動きがとれず、レンジは棚から飛び出し、冷蔵庫の中身もすべて散乱。まさに家中の物が前後に『泳いでいる』という感じの2分間でした」。

その日は中学生の次女・理恵さんの卒業式のため、仕事を休んで家にいた弘子さん。築6年の家は壊れなかったものの、家族バラバラで被災したため、娘3人の顔を見るまで、気が気ではありませんでした。

夫からは一度メールが来たきり音信不通。長女・榛香さんは、いわき市内の高校で被災したまま帰宅できず、家の中は電気や水といったライフラインがストップしました。余震が続く中、すぐに逃げられるよう玄関近くに布団を敷き、弘子さんは2人の娘と寄り添って、眠れぬ一夜を過ごしました。

事態が急変したのは翌朝、まだ薄暗い中『全町民避難』の放送が繰り返されました。

大熊町内にある「福島第一原発」が危機に直面しているとは思ってもせず、長女を迎えに車で高校へ向かいました。その道中で弘子さんは、震災の惨状を目の当たりにします。
「建物がベシヤンコにつぶれ、町並みがグシャグシャ…。あの光景は忘れられません。通れない道がほとんどで、車で片道1時間の高校まで5時間もかかりました」。

高校で長女と再会後、避難所の体育館に直行した弘子さん。そこで震災後初めて見たテレビの映像に言葉を失ったといいます。
「家の近くにある原発の爆発映像が映し出されていました。周囲は慌ただしく逃げる支度を始めていて…。現実を受け入れられないまま、避難所を後にしました」。

その後、横浜市を経由し、3月16日に両親のいる福智町へ避難した弘子さん。突然『被災者』となった心境をこう語ります。
「海沿いの友人は行方不明、無事だった人もみんなバラバラ。平穏な暮らしが一変しました。誰も『いつか災害にあうかも』と分かっているけど、それが『今日、明日のことかもしれない』とは思えないですよね。わたしも、自分が『被災者』になったなんて、いまだに信じられないんです」。

災害に『絶対安全』という場所はどこにもありません。弘子さんは、平時にこそ、いつ何があっても家族が生きのびるすべを考えておくべきだと強く訴えます。
「夫からは震災1週間後に連絡がありました。今も福島に残っています。いつか故郷に戻って、家族みんなの前のように暮らしたい…。そう願わない日はありません」。

Interview

福島県大熊町から福智町へ避難している坂本弘子さんに、地震発生時の状況をうかがいました。

